文：伊吾田宏正（「野生生物と社会」学会理事・酪農学園大学）

ハンターはかっこいい？

なぜ、欧米のハンターには〝かっこいい〟人が多いのだろうか？この私の問いは、逆に、なぜ日本のハンターにはかっこいい人が（あまり）多くないのだろう？　という問いと表裏をなしている。

今私はイタリアのミラノで国際狩猟会議（CIC）の総会に出席している。会場には洗練された服装の人が多く、式典用の伝統的な狩猟服を着ている人も少なくない。例えば、シカ角製のボタンを付けた深緑のウールやシカ皮でできたスーツと、鳥の羽や獣の毛で飾った山高帽などである。会員の社会的地位は高く、中には、PrinceやBaronといった肩書きの人もいて、若干たじろいでしまう。しかし、会話をすると、気さくなジェントルマンばかりで、狩猟や自然を心から愛しているという内面的な魅力が感じられる。

また、スロベニアのある小さな町のハンター夫妻の友人も大変かっこいい。訪問すると自分たちが捕ったシカのシチューやイノシシのサラミ、手作りのワインやチーズなどでもてなしてくれる。極めて豊かな生活だといつも思う。一緒に狩猟にいくと、写真のようにみんな緑色をベースとした狩猟服を身につけて、とてもセンスが良い。この国では、地元の狩猟クラブが主体的に地域の狩猟管理を担っており、そのことに対する誇りもひしひしと伝わってくる。

他にも、私がこれまで会った欧米のハンターには素敵な人が多かった。もちろん日本にも尊敬すべきハンターは何人もいる。しかし、日本ではハンターはオレンジ色のベストを着ている、どちらかというとセンスの悪い野蛮な人達などというネガティブなイメージをもたれている場合も多いと思う。欧米では反狩猟の勢力が（むしろ）強い。だからこそ、欧米の狩猟団体は、保全や環境教育などの活動にも力を注いでおり、またそれをメディアなどを通じてアピールするのが上手い。これからの日本の狩猟界も、外見と内面のかっこよさを追求していくべきだと強く思う。未来を担う子供たちが〝かっこいいハンター〟に憧れてくれるように。

スロベニアでの狩猟のヒトコマ（筆者は左から2人目）。現地ではハンターはかっこいい存在だ。

第20回「野生生物と社会」学会大会　2014年10月31日（金）～11月2日（日）
愛知県犬山市にて開催！！　詳細は学会ホームページでご確認ください　http://www.wildlife-humansociety.org/